骨角器の製作技術－里浜貝塚の骨篦を中心に－

山口沙織

１．先行研究と研究目的

貝塚からは様々な骨角器が発見される。そのうち、骨篦は主にシカの中手・中足骨や鯨骨などを素材としており、ヘラ状の刃部を有する。骨篦の他にも骨角匕、骨匕、ヘラ状骨製品といった名称がある。

本器種については清野謙次（清野 1914）や長谷部言人（長谷部 1925）にはじまり、金子浩昌と忍沢成視（金子・忍沢 1986）によって、その製作技術や列島全体の動向についてまとめられた。これらの検証のための製作実験も行われた（山川 1992）。1980 年代以降、資料の増加に伴い、田柄貝塚や根井貝塚など遺跡調査および地域単位での分析例が相次ぐ（宮城県教育委員会 1986、岩手県立博物館 1987）。本研究対象とする里浜貝塚では西畑地点での分析例などがある（小井川・岡村 1985）。骨篦の用途に関しては、「あわびおこし」のような磯物採取具説（岡崎 1986、熊谷 1998、渡辺 2003）が有力である。崎山弁天遺跡例（菊池 1973）ではイガイ・マガキの採捕用と考えられている。一方、陸前高田市大陽台貝塚例ではマグロの解体具とする説もある（牛沢 1979）。このような説を受けて、多様な用途を挙げる例もある（小井川・岡村 前掲）。前述の各報告書と同様に貝塚の貝の組成やマグロの出土量を里浜貝塚や近隣の貝塚と比較したうえで、カキの採捕やマグロの解体など特定の用途ではなく、その用途は多様なものであり、地域や遺跡ごとに変化する可能性に言及している。これらを検証するために、加藤幹樹は、骨篦にルーペを用いた観察を行い、観察によって得られた人為的に残された痕跡を道具の動かし方に着目して三分類した（加藤 2019）。この結果からは貝類の採捕以外の用途も考えうる。

上記の研究動向をふまえ、本論文では、中期中葉～晩期後葉の骨篦が多数検出された宮城県東松島市里浜貝塚出土骨篦の製作方法を明らかにし、骨角器の製作技術の変遷を明らかにする。対象は奥松島縄文村歴史資料館所蔵の骨篦 112 点である。このうち、完形、略完形の 44 点を実測した。そのほか、素材の検討では、東北歴史資料館の発掘調査報告のデータも加えた。本資料館所蔵の骨篦は、西貝塚の台囲地点、東貝塚の畑中・梨木囲地点、北貝塚の寺下囲・西畑・里地点の 6 地点出土であり、各地点の時期はそれぞれ範囲が限られる。まず、素材とその部位、肉眼による製作痕と使用痕を観察した。なお数が多いシカの中手骨または中足骨製は、さらに横割の前面・後面、縦割の内面・外面、四分割といった分割方向も観察した。

２．分析結果の概略

観察の結果、6 地点ごとの特徴が認められたため、分類を試みた。その際、素材、分割方向、分割方法、研磨痕と二次剥離といった分割後の加工の組み合わせに注目した。なお、里浜貝塚の骨篦は、全地点でシカの中手骨または中足骨が主な素材で、166 点中 153 点を占める。分割の際の使用面の地点差は小さい。また、研磨痕の方向は、左上から右下の斜め方向または横方向が多く、地点差は小さい。組み合わせを検討した結果、Ⅰ～Ⅳ類に分類した。Ⅰ～Ⅳ類はシカの中手骨または中足骨を素材とする。

Ⅰ類は、遠位端を利用して縦方向に分割される。遠位端の滑車部分が穿孔される場合がある。中期中葉～後葉に限定される。Ⅱ類は、近位端を利用して縦方向に分割される。素材取りの際、打ち割るA類と擦り切るB類に細分される。さらに、A類には擦り切り痕のガイドが入れられているものと入っていないものがある。縄文時代後期末～晩期初頭に集中する。Ⅲ類は、近位端を利用して横方向に分割される。素材取りの際、打ち割りによって分割され、裏面を剥離調整する。剥離後の研磨の有無で細分される。縄文時代後期末～晩期後葉に集中する。Ⅳ類は、近位端を利用して四分割に打ち割られる。中期中葉～晩期中葉の広い時期に認められる。Ⅴ類は、遠位端を利用して横方向に分割を行うものなど、Ⅰ～Ⅳ類に該当しないものである。Ⅵ類は、シカの中手骨または中足骨以外を素材とする。尺骨、橈骨、脛骨がある。後期末～晩期中葉にある。

このように、遠位端の利用する中期中葉～後葉のⅠ類から、後期末以降の近位端およびその他の素材を利用するⅡ・Ⅲ類への変遷がうかがえる。さらにⅡ・Ⅲ類は晩期中葉との間に製作方法上の変化がうかがえる。

３．考察

上記の結果をふまえ、三陸南部から福島浜通りの様相と比較した。その結果、里浜貝塚周辺の特徴として、中期中葉～後葉にⅠ類が多い点と、Ⅱ類の多くが後期末からピークを迎え、晩期末まで継続する点が挙げられる。次に、里浜貝塚で認められた変化と、他の骨角器の変化が相関するか、確認した。この地域によくみられる釣針や銛頭は、中期後半に技術変化がみられる(渡辺 1984)。またこれらは、後期中葉に二次的な形態変化が生じる。その背景に、外洋への進出を含む漁労活動域の変化と、漁労具の製作効率化による技術変化が指摘される(北田 2002)。よって、Ⅰ類からⅡ類への変化は、こうした分割の効率化を求める他の骨角器の変化と対応した可能性があるが、里浜貝塚での技術変化の時期とは一致しない。これには、捕獲具である釣針・銛頭と、採取具である骨篦という用途の違いや、沿岸と海岸といった使用場所の違いが反映されているとみられる。

以上、里浜貝塚の骨篦は、中期に遠位端の利用が多くみられ、後期末に近位端を利用して縦方向に分割する骨篦が増加する。他の地域に比べると、打ち割り、擦り切りどちらにおい

ても比較的遅い段階で隆盛する。なお縦割の場合、打ち割りが多く選択されることが分かった。打ち割り方向に注目すると、宮古地域から東部仙台にかけては大きな違いはなく、時期によって分割方向が縦割から横割へ変化する。こうした変化は、里浜貝塚では後期末から晩期初頭にかけて出現し、晩期中葉にピークを迎える。横方向の分割は打ち割りによって行われ、二次剥離で裏面を調整する。また、裏面に研磨が行われることもあり、基本的に左上から右下の斜め方向または横方向に行う。四分割は時期を問わず行われ、シカの中手骨または中足骨以外を素材とする骨篦は後期末からみられる。

今後の課題として本研究では、骨篦の製作技術を明らかにすることを目的とした。課題は 3 点ある。一つ目は製作の初期段階に想定できる遠位端ないし近位端の除去を行う方法やタイミングについて骨篦にはあまり痕跡が残っておらず、検討できなかった。里浜貝塚出土の動物遺存体と併せた分析や、製作実験による検証が必要とみられる。二つ目は、使用に関わる骨篦の先端部の形状変化の要因が、解明できなかった点である。先端部の形状は、使用による磨耗のほか、遠位端ないし近位端の除去のほか、素材の打ち割りによる分割によって決まる（山川 1992）。本研究では、使用実験を含む検討項目が多岐に渡る使用面での検討を避け、製作技術面から、里浜貝塚の実態を明らかにすることにした。しかし、使用を意識した分割法の違いも考慮すべきであり、今後、使用痕と製作技術の違いとの関係を検討する必要があろう。三つ目は、骨篦の出土点数が里浜貝塚に特に多い原因である。発掘規模などが影響するが、中期から晩期という長期にわたって骨篦が継続的に出土する遺跡は確認できず、環境面や素材の供給面をふまえた背景を考えていく必要があろう。

謝辞

本研究に際し、奥松島縄文村歴史資料館館長をはじめとする資料館の皆さまには資料の観察・実測ならびに作業場所を提供などでお世話になった。末筆ながら御礼申し上げます。